

国

語

注意

- 1、問題は【一】から【三】まであります。
- 2、試験時間は50分です。
- 3、解答は解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。
- 4、字数制限のある問題では、句読点やかっこ、その他の記号も一字に数えます。
- 5、答えを直すときは、きれいに消してから新しい答えを書きなさい。

受験
番号

氏名

【一】 次の各問に答えなさい。

問一 次の①～⑨の各文の傍線部を漢字に直して答え、⑩～⑮の傍線部の読み方をひらがなで答えなさい。

- | | | |
|--------------------|-------------------|--------------------|
| ① リンジのニュースが入った。 | ② 合唱でシキ者になった。 | ③ これからのホウシンを話し合う。 |
| ④ キシヨウ庁の天気予報を見る。 | ⑤ この紙には細かいモヨウがある。 | ⑥ タテに一列に並ぶ。 |
| ⑦ やつと鉄棒でサカアがりができた。 | ⑧ きらいなものを皿からノゾく。 | ⑨ 彼はわざわざ時間をサいてくれた。 |
| ⑩ 父の遺言の通りにする。 | ⑪ 人類の繁栄を願う。 | ⑫ 彼のアイデアは画期的だ。 |
| ⑬ 夕焼けが鮮やかだ。 | ⑭ 若者が町興しをする。 | ⑮ 暮らしを彩る花が咲く。 |

問二 次の①・②の文の状況を表す四字熟語を後の語群の中から漢字を選んで答えなさい。ただし、同じ漢字を二度以上使わないこと。

- ① 三日間なにも食べていなかったA君は、久しぶりのご飯のためか食べるのに夢中で、B君が話しかけても全く聞こえていないようだ。
- ② 夏休みに家族で登山にいった。はじめは晴れていたのに雲がかかって急に雨となり、また雲のすき間から青空が見えはじめるという天気だった。

化	田	千	下	一	乱
水	万	不	天	心	変

問三 次の①～③の空欄には「無・未・非・不」のいずれかが入るが、ふさわしいものをそれぞれ答えなさい。ただし、同じ漢字を二度以上使わないこと。

- ① 今日の作業が遅れた原因は私に（ ）手際があったからだ。
- ② 大統領との（ ）公式の会談があったことを認める。
- ③ この時間のコンビニの店員はいつも（ ）愛想な表情をしている。

【二】 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

私たちのごく日常的な経験として、小さい子どもといっしょにいと、子どもの言うことばが、詩のことばに似て、非常に詩的に聞こえるという経験を、おそらくだれしもが多かれ少なかれしたことがあるのではないだろうか。

たとえば、子どもがサイダーを初めて飲んで、その時の印象を、「水がのどにかみつけたよ」と表現している——私たちが聞くとき、何かとても詩的な感じでおもしろい。あるいは、同じようなサイダーの例になりますけれども、長らく座っていて足がしびれてしまったときの気持ちを、「足がサイダーになったよ」と表現する——これも、非常に面白い表現です。

ところで、ある雑誌に「子どもの広場」という欄があつて、小さい子の表現をお母さんが書きとつて、編集部に送ったものをいくつも収録しています。その中には、大変詩的に感じられるものがみつけられます。たとえば、次のようなものはどうでしょう。

ぼく
こおっちゃつて
とけちゃう
きもち
が
するよ

「おかあさんがおこると」と題された当時五歳の男の子の言ったことばです。私たちもこれに近い経験をしたときには、たとえば「身の縮む思いである」とか「② 穴があれば入りたい気持ち」などと言ったりすることがありますが、このような言い方は、現

在では比喩の感じがうすれてしまつて、むしろ、*1 陳腐な感じすら与えかねません。それに対して、この五歳の子が言つた表現というのは、非常に新鮮で、その気持ちがよく出ていていると思います。——頭の上の方から、お母さんが大きな声でガミガミとなる。自分は小さいし、逃げたいけれど A がすぐんで逃げられない。B 気持ち、それを「こおつちやつてとけちやう」というような非常におもしろい、ある意味では非常に詩的な感じがする表現です。

子どものことが詩のことに似てくることがあるということ——これはいったいどうしたわけなのでしょう。

おそらく、伝統的な説明の仕方ですと、子どもというのは純真ですから、そういう純真な気持ちが*2 たくまらずしてでてる、それがそのまま詩になるのである——そういう形で説明するのではないかと思ひます。

これはもちろん、まちがった説明ではありません。しかし、ここでは、その問題を少し違つた方向から——つまりことばそのものの働きと結びつけて考えてみたいのです。

(中 略)

私たちの日常生活では、ことばのきまりというものが習慣的に決まっています。そして、私たちはいちおうきまりの範囲内でことばを使うことで満足して、それを超えるというようなことは比較的まれです。二つのことばの違いかた——経験が先行してそれをことばで表すことと、ことばが先行してそれが新しい経験を生み出すこと——これは「伝達」と「創造」ということでとらえることもできますし、あるいはことばの「実用的」な働きと、ことばの「美的」な働きと言われることもあります。この後者のほうは詩のことばに典型的に見られるということ、ことばの「詩的」な働きという言い方をすることもあります。

私たちのことばについての認識は、ふつうその「実用的」な働きのほうに大變かたよつていて、もう一つの「詩的」な働きのほうは忘れられがちです。それは、この「詩的」な働きがよく現れるのは、詩のことばであるとか、子どものことばとかどちらかといひますと、③ ことばの「中心」ではない部分だからでしょう。そういうことばの「詩的」な働きというものが日常のことばにおいてよりも重要な役割を果たすという意味で、子どものことばと詩のことばとは似ているということが出来ます。どうしてそうなるのでしょうか。大人の場合ですと日常的な生活に関する限りは、経験の範囲と、ことばでもって表せる範囲がだいたい一致していると考えてよいでしょう。ところが子どもの場合は、その経験の範囲を表せるだけのことばの能力がまだ十分発達していない。その一方では子どもにとっては毎日が新しい経験の連続です。自分がすでに身につけていることばだけではとても新しい経験を十分に表現することができない。そうしますと、どうしても④ ことばの枠を破るということが起こるでしょう。子どものことばは、

常に何かきまつた範囲内だけにとどまつてゐるのではなくて、その枠を破つて広がっていくという傾向を示すわけです。

これはちやうど詩人の場合と同じことになるのではないのでしょうか。

普通の人、日常的な経験を日常的なことばで表現して満足しているのに対して、「詩人」と呼ばれるような人たちは、⑤ 日常的な経験を超える経験をもつでしょう。そして、それを表そうとすると、もはや日常のことばの使い方では不十分なはず。そこで、どうしても、日常のことばの枠を超えるということが必要になつてくるでしょう。このように考えますと、詩人の場合と子どもの場合はある意味で非常によく似た状況にあるということになります。

実用的なことならば日常のことばで足りるわけですから、実用を超えたことば遣いをするということは、ある意味で「遊び」であるということになります。しかし、遊びというのは考えてみますと、私たちにとつては非常に必要なものでもあります。「遊び」を通じて私たちは日常生活の*3 情性を抜け出して、そこに活性をもたらそうとします。「遊び」は決してつまらないものではなくて、私たちが日常生活に慣れきつてしまわないように、そしてそれを超えた何かを追い求める気持ちを失わないように、はずみをつけてくれるものとして、人間にとつてたいへん重要な意味合いを持つてゐるといえるでしょう。日本でも古い時代には「遊び」ということばはしばしば芸術や美ということと結びついて使われていました。たとえば、音楽を奏でるのも一つの「遊び」でした。何かある特定の実用的な目的に結びつかない、何かの単なる手段ではないということ——それが「遊び」の本質にもあるわけ、ことばが、創造的な意味を生み出すという方向でもあそばれるということも、美的とか、芸術的ということと深い関係があるわけです。日常の中に*4 埋没してゐない子どものことばは、そういう創造面が非常に強く出てくる場であると考えることが出来るのです。

(池上嘉彦『ふしぎなことば ことばのふしぎ』)

注

*1 陳腐……ありふれていること。ふるくさいこと。

*2 たくまらずして……何かの効果を考えたわけではなくて。

*3 情性……今までおこなつてきた勢い、慣れのこと。

*4 埋没……うもれて見えなくなること。

問一 問題文中の空欄 A にあてはまる語を漢字一字で答えなさい。

問二 問題文中の空欄 B には傍線部②「穴があれば入りたい」という意味のことばが入るが、それに最もよくあてはまるものを次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

イ 攻撃から自分をまもりたい
エ どこかへ消えてしまいたい

問三 問題文中の傍線部①「非常におもしろい表現です」とあるが、「足がサイダーになったよ」という表現のおもしろさを次の文の空欄X・Yにあてはまるように説明しなさい。ただし、Xは五字以上七字以内、Yは十字以上十五字以内とする。

問題文中の傍線部③「ことばの『中心』」とあるが、これはどういうことか。次の文の空欄にあてはまるように、十五字以上二十字以内で説明しなさい。

問五 問題文中の傍線部④「ことばの枠を破る」とあるが、同じ意味を表す部分を問題文中から十四字で抜き出さないさい。

ア 詩人のものとなえ方がこまやかであるために、日常的な経験を詩的な経験だと感じることができるといふこと。
イ 詩人は日常のことばへの不満から、日常のことばで表せる範囲以上の経験をことばで生み出すといふこと。
ウ 詩人はことばに合う経験を常に探し、普通の大人が気づきにくい経験をも感じようとしているといふこと。
エ 詩人のことばが詩的なものであるために、ことばで日常的な経験を詩的なものに変えることができるといふこと。

問七 問題文中において、筆者は「詩」をどういうものとらえているか。次の空欄にあてはまるように四十字以上五十字以内で説明しなさい。ただし「伝達」、「創造」、「日常」の三語を必ずこの順番で用いること。

「詩」は（四十以上五十以内）というもの

問八 次の選択肢ア～オについて、本文の内容にふさわしいものには○、ふさわしくないものには×で答えなさい。

ア 詩人はことばを新しいものにすることを使命として、習慣化してしまった大人のことばの使い方ではなく、子どもと同じようなことばの使い方をするによつて詩を作り、新たな経験を生み出そうとしている。

イ　ことは固定した使われ方をするだけのものではないのだが、大人は日常生活において意味が伝わることに満足してしまっている、ことが経験を生み出すというもう一つの働きを忘れてしまっている。

ウ 私たちが芸術にふれることでふだんの生活が活性化するように、実用的なことばの使い方だけで満足している大人は、習慣にとらわれない子どものことばにふれた時に、ことばの新鮮さを感じるのである。

工詩や音楽などのいわゆる芸術は、新しいものを生みだして日常の惰性を打ち破り活性化させるという「遊び」の意味を持っているので、こどものことばも「遊び」から生じる以上、芸術であると言える。

オ　子どもが生み出すことばが詩的に聞こえるのは、気持ちに純真だからであることはもちろんであるが、ことばを使った彼らの遊びによって生み出された表現が、新しいことばの世界を作り出すからである。

【三】 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

*1 二年前、私は妹をお供につけて母に五泊六日の香港旅行に行ってもらった。

「死んだお父さんに怒られる」とか「*2 冥利が悪い」と抵抗したが、もともとおいしいもの好きで、年にしては好奇心も旺盛な人だから、追いついてさえしまえばあとは喜ぶとはんつていたので、けんか腰の出発だった。

空港で機内持ち込みの荷物の改めがある。私は、母と妹が係官の前でバッグの口をあけているのをプラスチックの境越しに見ていた。

「ナイフとか危険なものは入っていませんね」

係官が型の如くたずねている。私は当然「ハイ」という答を予期したのだが、母は、ごく当り前の声で、

「いいえ持っております」

私も妹もハッとなった。

母は、大型の裁ちばさみを出した。

私は大声でどなってしまった。

「お母さん、なんでそんなものを持ってきたの」

母は私へとも係官へともつかず、

「一週間ですから爪が伸びるといけないと思ひまして」

係官は笑いながら「どうぞ」といって下すつたが、私は、中の待合室でなぜ爪切りを持ってこなかったのと*3 叱言をいった。

「出掛けに気がついたんだけど、爪切り探すのも① 気ぜわしいと思つて」

言いわけをしながら「お父さん生きてたら、叱られてたねえ」とさすがに母もしょんぼりしている。

少し可哀そうになったので、私はそつと立つて花屋へゆき、蘭の*4 コサージュを作ってもらった。三千円を二千五百円に値切り、母に手渡すと今度はえらい*5 見幕で怒るのである。

② 「何様じゃあるまいし、お前は② どのようにしてこんな勿体ないお金の使い方をするの」

あげくの果ては返しておいでよ、と母子げんかになってしまった。一生に一度のことなんだからいいじゃないのと妹がとりなし

て、やっときげんが直り、胸につけたところで、搭乗を知らせるアナウンスがあつた。列を作つて改札口へ入りながら、母は急に立ちどまると、立っている私の方を振り向いた。てつきり手を振ると思つたので私は右手をあげた。母は深々とお辞儀をした。

私も釣られて、片手を振りかけたまま頭を下げたので 天皇陛下のようになってしまった。

私は入場券を買つて*6 フィンガーに出た。冬にしてはあたたかいみごとに晴れた日であつた。まっ青な空の一点が*7 雲母のように光つて、飛行機が飛び立ち下りてくる。

母の乗っている飛行機がゆつくりと滑走路で向きを変え始めた。急に

「どうか落ちないで下さい。どうしても落ちるのだったら帰りにして下さい」

と祈りたい気持になった。

飛行機は上昇を終り、高みで旋回をはじめた。もう大丈夫だ。どういうわけか不意に涙が溢れた。たかが香港旅行ぐらいで自分分を笑いながら、さっきの裁ちばさみや蘭の花束のことを思い合せて③ 口許は声を立てて笑っているのに、お天気の雨のように涙がとまらなかつた。

祖母が亡くなったのは、戦争が激しくなるすぐ前のことだから、三十五年前だろうか。私が女学校二年の時だった。

通夜の晩、突然玄関の方にざわめきが起こった。

「社長がお見えになった」

という声がした。

祖母の棺のそばに坐っていた父が、客を蹴散らすように玄関へ飛んでいった。式台に手をつき入ってきた初老の人にお辞儀をした。

それはお辞儀というより*8 平伏といった方がよかつた。当時すでにガソリンは統制されており、民間人は車の使用も思うにまかせなかつた。財閥系のかなり大きな会社で、当時父は一介の課長に過ぎなかつたから、社長自ら通夜にみえることは予想していなかつたのだろう。それにしても、初めて見る父の姿であつた。

物心ついた時から父は威張っていた。家族をどなり自分の母親にも高声を立てる人であつた。地方支店長という*9 床柱を背にして上座に坐る父しか見たことがなかつた。それが*10 卑屈とも思えるお辞儀をしているのである。

X 私は、父の暴君振りを嫌だと思っていた。

母には指環ひとつ買うことをしないのに、なぜ自分だけパリッと糊の利いた白麻の背広で会社へゆくのか。部下が訪ねてくると、分不相応と思えるほどもてなすのか。私達姉弟が*11はいかになろうと百日咳になろうとおかまいなしで、一日の遅刻欠勤もなしに出かけていくのか。

高等小学校卒業の学力で*12 給仕から入って誰の引き立てもなしに会社始まって以来といわれる昇進をした理由を見たように思った。私は亡くなった祖母とは同じ部屋に起き伏した時期もあったのだが、肝心の葬式の悲しみはどこかにけし飛んで、父のお辞儀の姿だけが目に残った。私達に見せないところで、父はこの姿で戦ってきたのだ。父だけ夜のおかずが一品多いことも、保険契約の成績が思うにまかせない締切の時期に、八つ当りの感じで飛んできた拳骨をも 許そうと思った。私は今でもこの夜の父の姿を思うと、胸の中でうずくものがある。

母は子供たちにお辞儀をみせてくれたが、父は現役のまま六十四歳で、しかも一瞬の心不全で急死したので、遂に子供には頭を下げずじまいであった。晩年は多少折れたようなものの、やはり叱りどなり私達に頭を下げさせたまま死んだ。

④ 親のお辞儀を見るのは複雑なものである。

*13 面映ゆいというか、当惑するというか、おかしく、かなしく、そして少しばかり腹立たしい。

自分が育て上げたものに頭を下げるということは、つまり人が老いるということは避けがたいことだと判っていても、子供としてはなんとも切ないものがあるのだ。

(向田邦子『父の詫び状』)

注

*1 二年前……一九七五年のこと。当時筆者は四十六歳くらいで、母は六十七歳くらい。

*2 冥利が悪い……神仏の加護が受けられない、ばちがあたるということ。

*3 叱言……人をしかったり注意したりすることば。

*4 コサージュ……女性の胸飾りなどにする小さな花束。コサージュ。

*5 見幕……怒ったときなどの、はげしい顔つきや態度。

*6 ファインガー……空港で、飛行機の発着場近くに張り出した建物の部分。送迎デッキ。

*7 雲母……真珠のような光沢をもった、きらきらしてはがれやすい鉱物。

*8 平伏……両手をつき頭を地面につけて礼をすること。ひれふすこと。

*9 床柱……床の間の、部屋の中央にあたる所にある化粧柱。

*10 卑屈……人にへつらったり、自分をいやしめたりして、いじけている様子。

*11 はしか……子どもに多い感染症の一つ。あとの「百日咳」も同じ感染症の一つ。

*12 給仕……こまかい雑用をする係。

*13 面映ゆい……うれしくはずかしいこと。てれくさいこと。

問一 問題文中の傍線部①「気ぜわしい」の意味として最適なものを次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 落ち着かなく面倒だ イ おそらく不必要だ ウ なんとなく気味が悪い エ おそろしく不安だ

問二 問題文中の空欄 B には体のある部分の名前を用いて「身分・地位」という意味になる語句が入るが、ひらがな四字で答えなさい。

問三 問題文中の傍線部②「お前は どうしてこんな勿体ないお金の使い方をするの」とあるが、この言葉から読み取れる「母」の気持ちを説明したものとして最適なものを次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のためではなく、娘自身のためにお金を使ってほしいという気持ち。
イ もう落ち込んでないので、なぐさめてもらう必要はないという気持ち。
ウ 自分には安い花で十分であり、高すぎる花は釣り合わないという気持ち。
エ お金を使わなくても、なぐさめようとしてくれただけで十分だという気持ち。

問四 問題文中の空欄 A に入れるのに最適なものを次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目頭があつくなる イ 胸がしめつけられる ウ 鼻の奥がつんとする エ 血の気が引いていく

問五 問題文中の傍線部③「口許^{くちぐも}は声を立てて笑っているのに、お天気雨のように涙がとまらなかった」とあるが、このときの「私」の気持ちを説明したものとして最適なものを次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たかだか数日間の香港旅行ぐらいしか行かせてあげられない自分を情けなく思いながらも、母が喜んでいる姿がとてもうれしく思う気持ち。

イ 飛行機が高く飛び立ち、もう心配はないとほっとしながらも、いまだにどこかで飛行機が落ちるのではないかと不安で仕方がないという気持ち。

ウ 母が数日間の香港旅行ぐらいで喜んでくれるのをうれしく思うが、できるなら父と一緒に行かせてあげたかったと申し訳なく思う気持ち。

エ 飛行機の旋回を見て安心すると、それまで心配していた自分をおかしく思うとともに、母へのいとおしさが込みあげてくる気持ち。

問六 問題文中の波線部 X 「私は、父の暴君振りを嫌だと思っていた」から、波線部 Y 「許そうと思った」へと「私」の気持ちに変化しているのはなぜか。きっかけをあきらかにして四十字以上五十字以内で自分の言葉を用いて説明しなさい。

問七 問題文中の傍線部④「親のお辞儀を見る」とあるが、「私」は「親のお辞儀」をどのようなものとして受けとめているのか。問題文中の二つの出来事をふまえて、十五字以上二十字以内で説明しなさい。

逗子開成中学校

二〇一二年度 一次入試 国語

訂正

七ページ 問題文三行目

わか

(誤) はんって

←

わか

(正) 判って

以上

得点